VISIONS OF JOURNALIST

担当記者たちが語る!

農林中央金庫と日本の農業

農林中央金庫という存在は、マスメディアに、そして社会に、どのように理解され受け止められているのか。
日本の農業で変革が叫ばれ、国内外の金融環境が変化するなか、農林中央金庫には何が求められているのか。
農林中央金庫の取材を続けてきた新聞記者４氏から、忌憚のない声を聞いた――

わかりにくさの根源は？

福島　農林中央金庫という組織やJAバンクという枠組みを詳しく知るようになったのは農水（農林水産省）担当になってからでした。まずJAがあって、次に都道府県信連（信用農業協同組合連合会）があって、さらに農中があるというJAバンクの仕組みも一般には知られていないし、JA、信連、農中がそれぞれどういう役割を担（にな）っているのかも知られていません。農中が誤解されることがあるのは、知られていないせいではないかなと。

小林　私も担当が農水省で、ふだん金融をメインで見ているわけではありませんから、初めは「JAバンク」という銀行があるのかなという誤解から入りましたね。そうではなくてJA、信連、農中とそれぞれの役割があって、そのうえでお金の流れができているという点に驚きましたし、これをすぐに理解してもらうのはすごく難しいのではないかと思いました。農林中央金庫だけ理解しようとしてもまずできない。

奥田　私は金融担当でマーケット面から入ったため、農中は巨大な機関投資家だという意識が8割くらいあって、お金を貸すほうの業務にはあまり印象がなかったんです。貯金が全国の組合から上がってきて、農中の資産規模が今100兆円。これだけの資金を持っている投資体というのは、GPIF（年金積立金管理運用独立行政法人）に次ぐ規模でしょう。かつ、いろいろな海外投資を昔からやっていたり、オルタナティブ投資をやっていたり、投資・運用の面での話題が多いので、農業融資の話を書こうとするとなかなか難しい。

織田　私は今、国際報道を手がけていますが、もともと農中を最初に取材したのは90年代で、住専（住宅金融専門会社）問題のとき。テーマは貸出機関としての農中でした。その後は金融をフォローアップするなかで機関投資家としての農中を見ていたので、農業金融機関としての農中を見る機会はなかなかなかった。農中の担当記者に金融担当がいたり、農政担当がいたりすることからわかるとおり、農中には2つの面があって、それがわかりにくさにつながっているんじゃないですかね。金融機関として見るのか、JAバンクの一環として見るのか、そこがなかなか悩ましい。

奥田　巨大運用者として見る分には農中はシンプルなんですけどね。

織田　金融機関としての農中は他の民間銀行とそう変わりません。そういう意味ではわかりやすい。ただ、JAとの関係性が本当のところはどうなんだとか、農林中金がJAバンクのなかでどういうポジションを占めようとしているのかとか、そういうあたりが私は今でもわからないんです。

小林　農中やJAバンクとは何かをきちんと理解している人は限られるのではないでしょうか。農中とつきあいのある人や農業関係者はわかっているでしょうが、それ以外の人は、政府の議論でときどき話題になるという印象があるくらいで。

織田　わかりにくいのは農中の位置づけ。農中は農業融資をやるべきなのかどうか。むしろ信連やJAに任せて、農中は運用に特化するべきなのか。JAグループ全体のなかで農中をどう位置づけるのか。もしかするとこれは、単位農協をどうするのかというところから始まる問題ではないかと。

矢面に立たされる理由

小林　農業金融の観点から言うと、これだけ農業の競争力強化が叫ばれて国の政策としても推進しているなかで、JAグループ全体として何をしていくのかを考えるとき、大事なのは総合力をどう発揮するのか。JAバンクはJA・信連・農中に分かれていて、巨大な組織ゆえに縦

割りになっている面もあるかもしれないですが、全体では農業の現場や金融に関してものすごく情報を持っています。それを持ち寄って農業のために何ができるか、そこを模索する姿を、もっとアピールできるのではないかと。

福島　農中自身は自分たちの役割が明確だと捉えてきたので、対外的に発信していく必要はあまりないと思っていた期間が長かったんじゃないでしょうか。自分たちならではの役割を持って真面目にコツコツやってきて、外に対して働きかけるとか、見せ方を考えるとか、そういう点に取り組んできたわけではなかった。だから「農中とは何ぞや」という点が見えにくくなっているのかなと思っています。

織田　農林中金自身、「こういう金融機関です」と自分から打ち出そうとしていなかったと思います。そういう必要もなかったろうし、だからこそ今まで、ロー・キー（目立たない状態）でやってこられたんじゃないかな。

奥田　一般の人たち、特に関心がない人は農中を政府系金融機関か何かだと思っています。「そうじゃないんだよ」という点、せめてそこくらいはもっと発信しないといけない。政治から責められても、農林中央金庫という名前なんだから仕方ないだろうという気がしてしまいますが、実際は民間の金融機関。それなのに政治の意向に従わざるをえない状況があるのは、なにか違うなぁという気がします。

織田一〈おだ・まこと〉
朝日新聞社機動特派員／特別報道部員
長崎県出身。1990 年代から金融担当記者・キャップを歴任。
現在は国際報道に携わる。

小林輝彦〈こばやし・てるひこ〉
共同通信社編集局経済部記者
東京都出身。農政担当キャップ。

小林　小泉（進次郎自由民主党元農林部会長・現筆頭副幹事長）発言当時、私は担当ではなかったのですが、後になって振り返れば、政治から見ると農中は攻めやすいところだったんだなという印象を強く受けました。70 兆円もの規模の資金運用をしてきていながら、機能や役割が知られていないという、わかりにくさが突っ込まれる要因になったのではないですかね。ただ、農業の成長産業化という課題のもとで農中が果たしている役割はどうなのかという観点からすると、攻められてもやむをえない部分があったのではないかとも思います。農林中金が農林水産業の活性化や成長に役割を果たしている姿が捉えにくいところがありますから。JA や信連もあって農中の機能が見えにくい面もあるので、厳しい批判を跳ね返したいのなら、反論できるだけの材料を持っておくべきだと思います。

福島　小泉さんが挙げた農業融資の数字は農中

だけの分で、JAや信連の数字は含まれていませんでした。JAバンク全体で見ると額はもっと大きい。それを知ったのは、農業を担当するようになってからです。私たちも大きく報道していないという責めはありますが、農中も材料は持っているのだから、主張すればいいのになと思います。

VISIONS OF JOURNALIST

新たな取組みを評価すると

織田　農林中金は資金運用の成果をJA、信連に還元することで十分役立ってきたと考えています。政治の側が農業融資を問うなら、農中単体ではなく、JAバンク全体としてどうなのかを問うべきでした。ただ、農林中金自体が変わらなければいけない時代であることも確か。国際分散投資でも運用が難しくなってきている今、集めたお金をどうやって回していくのかという大きな課題に直面しているわけですから。農中をどう変えていくかとなると、JAバンク全体をどう変えていくんだという話になる。農政改革、金融改革というのは必要だと思います。

小林　変革への取組みということで言えば、

奥田宏二〈おくだ・こうじ〉
日本経済新聞社編集局経済部記者
大分県出身。2018年3月まで金融担当。
現在は厚生労働省担当キャップ。

福島春菜〈ふくしま・はるな〉
読売新聞東京本社編集局経済部記者
石川県出身。農政担当記者。

農中は最近、食農ビジネスに取り組んでいて、これがどう育っていくかなと関心を持っています。そのなかに海外輸出向けの商談会やセミナーがあるんですが、力を入れてやるのであれば、JAグループ全体としての力を発揮する場面がかなり出てくるのではないかと。全農（全国農業協同組合連合会）も輸出に力を入れていますし、具体的な数字が挙がってくるようになると、すごく面白いと思います。すでに輸出の数字が伸びているのは、商談会を密にやったりする地道な取組みが功を奏している結果だと聞きます。一足飛びでうまくいくことはないでしょうが、農林中金としてどんな役割を果たせるかに注目していきたいですね。目立った成功事例がいくつも出てくれば景色も変わってくるでしょう。

福島　食農ビジネスなどの取組みで農業の周辺部分にもビジネスを拡大させてきているところが新しいと思います。農業融資の面では、農中単体としての額は比率からすると少ないのかもしれませんが、JAでは小規模農家にも貸しています。一般の地銀では小さな農家にはなかなか貸さないでしょうから、JAバンク全体として本来の役割を果たしていると言えるのではな

いですか。もっとも、地銀も農業融資を増やしていますから、JAバンクはどういうふうに独自性を出していくのか。食品加工業者、流通業者ともつながりが強い地銀に対してどういう点を長所としてアピールしていけるのかに注目していきたいですね。

奥田　投資ビジネスでは農中は国際分散投資を着実にやっているし、新しい分野のインフラ投資（オルタナティブ投資）も1兆円くらいの規模まで増えていて、その結果、他の国内の機関投資家も追随しているくらいです。農中で運用を手がけてきた高橋さん（高橋則広元農林中央金庫専務理事・前JA三井リース社長）がGPIFの理事長になったのも、機関投資家としての農中の評価が安定しているから。2008年に起きたリーマン・ショックのときには大規模増資をやりましたが、その後の安定ぶりは、見ていてつまらないくらい（笑）。それはもちろん、金融機関としてあるべき姿です。

織田　不良債権時代もリーマン以降のこの10年も、きちっと乗り越えてきていて、金融機関としては農中は非常にうまくやってきていますね。ただ、JA貯金100兆円という目標を達成した後、次の目標がまだはっきり見えていません。超低金利や外貨調達コストの上昇などで運用難が続いていたり、国内がオーバーバンキングの状態にあって地銀再編の流れが出てきていたりで、今後はどうするのか、どういう姿を目指していくのかに、ものすごく注目しています。農林中金は運用のプロですが、一方で農業の課題を解決すべきだとも求められている。食農ビジネスはアイデアとしては素晴らしくて面白いと思いますが、どこまで大きくなるのか。農中にしかできない農業の課題解決の一歩ではあるけれど、本当に農業の現場に入っていくとなると、たとえば人手不足の問題にまで手を付けなくてはならなくなっていきます。

VISIONS OF JOURNALIST

期待と課題にどう応える？

小林　農業の担い手の高齢化はずっと指摘されていることですが、解決していませんし、解決するかどうかもわからない。今後何十年も農業の世界で生きていけるような若い人をどれだけ呼び込めるかが勝負でしょう。そのためには農業は有力な就職先のひとつになっていかなければ……。国内での生産が細ってしまうと、輸出にも力を入れられなくなる。そのためにも、生

産力は大事なんだよというアピールは必要かなと思っています。

福島　やはり不安は人手不足ですね。今、新規就農者が増加傾向にあります。私自身、学生時代、園芸サークルでトウモロコシやソバを作ったり農家の田植えを手伝ったりした経験もありますが、やはり、まだまだ絶対的な人数は足りない。外国からの技能実習生への依存が強まっているというのが実情です。人手の面だけを見ても日本の農業は本当にサステナブルなのかという疑問があって、これを解消していくことは、農林中金がサステナブルであるためにも必要でしょう。

奥田　高齢化と人手不足に金融機関が提供できるソリューションとしては、農業従事者の負担軽減や省力化につながるテクノロジーに融資・出資する手があります。そういう情報は国内では東京に集まりがちですから、東京に本拠のある農中にとって有利な取組みになる。農家や農業法人への貸出だけを農業融資と捉えて、そればかり増やすことが本当に日本の農業のためになるんでしょうか。農業融資をもっと幅広く考えて、農家の負担軽減とか生産性向上とかを実現させてくれる企業、そういう農業の周辺部分への融資も農業融資に含めた方がいいのではないでしょうか。

小林　農中はすでに出資の形でのリスクマネーの供給も始めていますよね。その成果をきちんと評価したうえで、順当に回っているのなら、もっとやるべきだと思います。

奥田　農林中金はリーマン・ショックのときに大きな損失を出しましたが、今は投資対象の中身をすごく精査して投資している。そういう話を、農林中金に（金融商品などを）セールスする側の金融機関から聞きます。10 年も経つと元に戻ってしまう機関投資家が多いなか、投資対象の精査をずっと続けているというのはすごい。今後は貯蓄から資産形成へという流れに乗ろうとしていますよね。販売の現場も含め、態勢面を整えていけるかという課題はありますが。

織田　農中は確かにこれまでいろいろな状況の変化に対応してきました。グローバル投資も国内で先駆けてやった。国内外での農業や金融の環境の変化に対応するために、これからも農林中金が変わっていかなければいけないことは間違いありません。

この座談会で挙げられたさまざまなテーマや課題の中には、この冊子の 24 ページ以降にて報告させていただいているものもあります。ぜひご一読ください。

疑問、批判から期待、提言まで、率直にお話しくださった記者の皆さん、大変ありがとうございました。

［VALUE REPORT 2018 編集チーム］